

# 蛩南鴨色壳

花鏡泉

青空文庫



はじめ、目に着いたのは——ちと申兼ねるが、——とにかく、緋縮緬ひぢりめんであつた。その燃立つようなのに、朱で処々ところどころぼかしの入つた長襦袢ながじゆばんで。女は裾を端折つていたのではない。褌つまを高々と掲げて、膝で挟んだあたりから、紅くれなゐがしつとり垂れて、白い足くびを絡まとつたが、どうやら濡しよびれた不気味さに、そうして引上げたものらしい。素足に染まつて、その紅あかいのが映りそうなのに、藤色の緒の重い厚ぼつたい駒下駄こまげた、泥まみれなのを、弱々と内輪に揃えて、股またを一つ振よじつた姿で、降ふりしきる雨の待合所の片隅に、腰を掛けていたのである。

日永ひながの頃ゆえ、まだ暮くれかかるまでもないが、やがて五時ごじも過ぎた。場所は院線電車の万ま世橋んせいばしの停車場じやうちやうの、あの高い待合所であつた。

柳たけなわはほんのりと萌もえ、花はふつくりと荅つばんだ、昨日今日、緑くれない、紅くれない、霞の紫、春のまさに闌たけなわならんとする気を籠こめて、色の濃く、力の強いほど、五月雨さみだれか何ぞのような雨の灰汁あくに包まれては、景色も人も、神田川の小舟さえ、皆黒い中に、紅梅とも、緋桃ひとうとも言うまい、

横しぶきに、血の滴るごとき紅木瓜べにぼけの、濡れつつぱと咲いた風情は、見向うもののおもて面のほてるばかり目覚しい。……

この目覚しいのを見て、話の主人公となつたのは、大学病院の内科に勤むる、学問と、手腕を世に知らるる、最近留学して帰朝した秦宗吉氏はたそうきちである。

辺幅へんぷくを修めない、質素な人の、住居すまいが芝の高輪たかなわにあるので、毎日病院へ通うのに、この院線を使つて、お茶の水で下車して、あれから大学の所在地まで徒歩するのが習ならひであつたが、五日も七日もこう降り続くと、どこの道もまるで泥海つとめにのようであるから、勤人じんが大路の往還ゆききの、茶なり黒なり背広で靴は、まったく大袈裟おおげさだけれど、狸が土舟つとめという体ていがある。

秦氏も御多分に漏れず——もつとも色が白くて鼻筋の通つた処はむしろ兎の部に属してはいるが——歩行あるき悩んで、今日は本郷どおりの電車を万世橋で下りて、例の、銅像を横に、大な煉瓦れんがを潜くぐつて、高い石段を昇つた。……これだと、ちよつと歩行あるただけで甲武線は東京の大中央を突抜けて、一息に品川へ……

が、それは段取だけの事サ、時間が時間だし、雨は降る……ここも出入ではいりがさぞ籠かむだらう、と思つたより夥おびただしい混雑で、ただ停車場などと、宿場がつて済すましてはおられぬ。川

留<sup>わどめ</sup>か、火事のように湧<sup>わきた</sup>立ち揉<sup>もみ</sup>合う群集の黒山。中野行を待つ右側も、品川の左側も、二重三重に人垣を造つて、線路の上まで押<sup>おつか</sup>覆<sup>かぶ</sup>さる。

すぐに電車が来た処で、どうせ一度では乗れはしまい。

宗吉はそう断<sup>あきら</sup>念<sup>め</sup>めて、洋傘<sup>こうもり</sup>の雫<sup>しずく</sup>を切つて、軽く黒の外<sup>がい</sup>套<sup>とう</sup>の脇に挟みながら、薄い皮の手袋をスツと手首へ扱<sup>しご</sup>いて、割合に透いて見える、なぜか、硝子<sup>がらす</sup>罎<sup>がこい</sup>の温室のような気のする、雨<sup>あまけ</sup>気と人の香の、むつと籠<sup>こも</sup>った待合の裡<sup>うち</sup>へ、コツコツと——やはり泥になつた——佻<sup>わびし</sup>い靴<sup>さき</sup>の尖<sup>さき</sup>を刻んで入つた時、ふとその目覚しい処を見たのである。

たしか、中央の台に、まだ大<sup>おお</sup>な箱<sup>おびき</sup>火鉢<sup>おき</sup>が出ていた……そこで、ハタと打<sup>ぶ</sup>撞<sup>つ</sup>つたその縮緬<sup>ぶつ</sup>の炎から、急に瞳<sup>まなこ</sup>を傍<sup>わき</sup>へ外<sup>そ</sup>らして、横<sup>よこ</sup>ざまにプラットフォームへ出ようとすると、戸口の柱に、ポンと出た、も一つ赤いもの。

## 二

威<sup>おど</sup>かしては不<sup>い</sup>可<sup>け</sup>ない。何、黒山の中の赤帽で、そこに腕組をしつつ、うしろ向きに凭<sup>もた</sup>掛<sup>れ</sup>かかっていたが、宗吉が顔を出したのを、茶色のちよんぼり髻<sup>ひげ</sup>を生<sup>はや</sup>した小白い横顔で、じろり

と撓めると、

「上りは停電……下りは故障です。」

と、人の顔さえ見れば、返事はこう言うものと極めたようにほとんど機械的に言った。そして頸窟ほんのくぼをその凭掛った柱で小突いて、超然とした。

「ヘッ！ 上りは停電。」

「下りは故障だ。」

響ひびきの応ずるがごとく、四五人口々に饒舌しやべした。

「ああ、ああ、」

「堪たまらねえなあ。」

「よく出来てら。」

「困ったわねえ。」と、つい釣込まれたかして、連つれもない女学生が猪首いくびを縮めて呔つぶやいた。が、いずれも、今はじめて知ったのでは無さそうで、赤帽がしかく機械的に言うのでも分る。

かかる群集の動揺どよむ下に、冷然たる線路は、日脚に薄暗く沈んで、いまに鯨はぜが釣れるから待て、と大都市の泥海に、入江のごとく彎曲わんきよくしつつ、伸々のびのびと静まり返って、その

癖底そごびかり 光のする齒の土手を見せて、冷笑あざわらう。

赤帽の言葉を善意に解するにつけても、いやしくも中山高帽やまたかを冠かぶつて、外套も服も身に添った、洋行がえりの大学教授が、端近はしぢかへ押出して、その際じたばたすべきではあるまい。

宗吉は——煙草たばこは喫くまないが——その火鉢ひばちの傍そばへ引籠ひきこもろうとして、靴を返しながら、爪尖つまさきを見れば、ぐしよ濡ぬれの土間に、ちらちらとまた紅くれなゐの褌はかまが流れる。

緋鯉ひいが躍ひつたようである。

思わず視線の向うのと、肩を合せて、その時、腰掛を立上った、もう一人の女がある。

ちようど緋縮緬まゐらひのと並んでいた、そのつれかとも思われる、大島の羽織を着た、丸髻まるまげの、脊の高い、面長な、目鼻立のきつぱりした顔を見ると、宗吉は、あつと思つた。

再び、おや、と思つた。

と言うのは、このごろ忙しさに、不沙汰ぶさたはしているが、知己ちかづきも知己、しかもその婚禮の席つらなに列いつた、従弟いとこの細君いとこにそっくりで、世馴よなれた人間だと、すぐに、「おお。」と声を掛けるほど、よく似ている。がその似ているのを驚いたのでもなければ、思い掛けず出会つたのを驚いたのでもない。まさしくその人と思うのが、近々ちかぢかと顔を会わせながら、す

つと外らして窓から雨の空を視た、取つても附けない、赤の他人らしい処置振に、一驚を吃したのである。

いや、全く他人に違いない。

けれども、脊恰好から、形容、生際の少し乱れた処、色白な容色よしで、浅

葱の手柄が、いかにも似合う細君だが、この女もまた不思議に浅葱の手柄で。鬢の色つぼ

い処から……それぞれ、少し仰向いている顔つき。他人が、ちよつと眉を擧める工合を、

その細君は小鼻から口元に皺を寄せる癖がある。……それまでが、そのまま、電車を待

草臥れて、雨に侘しげな様子が、小鼻に寄せた皺に明白であつた。

勿論、別人とは納得しながら、うっかり口に出そうな挨拶を、唇で啣留めて、心着

くと、いつの間にか、足もやや近づいて、帽子に手を掛けていた極の悪さに、背を向けて

立直ると、雲低く、下谷、神田の屋根一面、雨も霞も漲つて濁つた裡に、神田明神の森が

見える。

と、緋縮緬の女が、同じ方を凝と視ていた。

鼻の隆いその顔が、ひたひたと横に寄つて、胸に白粉の着くように思った。

宗吉は、愕然とするまで、再び、似た人の面影をその女に発見したのである。

緋縮緬の女は、櫛巻に結つて、黒縮緬の紋着の羽織を撫肩にぞろりと着て、瘦せた片手を、力のない襟に挿して、そうやつて、引上げた褌を圧えるように、膝に置いた手に萌黄色のオペラバッグを大事そうに持っている。もう三十を幾つも越した年紀ごろから思うと、小児の土産にする玩弄品らしい、粗末な手提を——大事そうに持っている。はきものも、襦袢も、素足も、櫛巻も、紋着も、何となくちぐはぐな処へ、色白そうなのが濃い化粧、口の大きく見えるまで濡々と紅をさして、細い頸の、真白な咽喉を長く、明神の森の遠見に、伸上るような、ぐつと仰向いて、大きな目を凝と睜つた顔は、首だけ活人形を継いだようで、綺麗なよりは、もの凄い。ただ、美しく優しく、しかもきりりとしたのは類なきその眉である。

眉は、宗吉の思う、忘れぬ女と寸分違わぬ。が、この似たのは、もう一人の丸鬚の方が、従弟の細君に似たほど、適格したものでは決してない。あるいはそれが余りよく似たのに引込まれて、心に刻んだ面影が緋縮緬の方に宿つたのであろうも知れぬ。

よし、眉の姿ただ一枚でも、秦宗吉の胸は、夢に三日月を呑んだように、きらりと尊く輝いて、時めいて躍ったのである。

——お千と言った、その女は、実に宗吉が十七の年紀の生命の親である。——  
しかも場所は、面前彼処に望む、神田明神の春の夜の境内であつた。

「ああ……もう一呼吸で、剃刀で、……」

と、今視めても身の毛が悚立つ。……森のめぐりの雨雲は、陰惨な鼠色の隈を取つた可  
恐い面のようで、家々の棟は、瓦の牙を噛み、齒を重ねた、その上に一処、二処、三処、  
赤煉瓦の軒と、亜鉛屋根の引剥が、高い空に、赫と赤い齒茎を剥いた、人を啖う鬼  
の口に髣髴する。……その森、その樹立は、……春雨の煙るとばかり見る目には、三ツ  
五ツ縦に並べた薄紫の眉刷毛であろう。死のうとした身の、その時を思えば、それも逆に  
生えた蓬々々の髣髴である。

その空へ、すらすらと雁のように浮く、緋縮緬の女の眉よ！ 瞳も据つて、瞬きもしな  
いで、恍惚と同じ処を凝視めているのを、宗吉はまたちらりと見た。

ああその女？

と波を打って轟く胸に、この停車場は、大なる船の甲板の廻るように、舳を明神の森に

向けた。

手に取るばかりなお近い。

「なぞえに低くなつた、あそこが明神坂だな。」

その右側の露路の突当りの家で。……

——死のうとした日の朝——宗吉は、年紀としうえ上の渠かれの友達に、顔を剃あつてもらつた。……  
その夜、明神の境内で、アワヤ咽喉のんどに擬したのはその剃刀であるが。

(ちよつと順序を附つけよう。)

宗吉は学資もなしに、無鉄砲に国を出て、行ゆきどころ処ところのなさに、その頃、ある一団の、取留めのない不体裁なその日ぐらしの人たちの世話になつて、辛うじて雨露うろを凌しのいでいた。

その人たちというのは、主に懶惰らんだ、放蕩ほうとうのため、世に見棄てられた医学生いせいせいの落第らくだいなまで、年輩も相応、女房持にようぼうもちなども交まじつた。中には政治家の半端もあるし、実業家の下積、山師も居たし、真面目まじめに巡查になろうかというのもあつた。

そこで、宗吉が当時寝泊りをしていたのは、同じ明神坂の片側長屋の一軒で、ここには食うや食わずの医学生あがりの、松田と云うのが夫婦で居た。

その突当りの、柳の樹に、軒燈の掛つた見晴みはらしのいい誰かの妾しやうたく宅たくの貸間に居た、露

の垂れそうな綺麗なのが……ここに緋縮緬の女が似たと思う、そのお千さんである。

## 四

お千は、世を忍び、人目を憚る女であつた。宗吉が世話になる、渠等なかまの、ほとんど首領とも言うべき、熊沢という、追て大実業家となると聞いた、絵に描いた化地蔵のような大漢が、そんじよその辺のを落籍したとは表向、得心させて、連出して、内証で困っていたのであるから。

言うまでもなく商売人だけれど、芸妓だか、遊女だか——それは今において分らない——何しろ、宗吉には三ツ四ツ、もつとかと思う年紀上の綺麗な姉さん、婀娜なお千さんだったのである。

前夜まで——唯今のような、じとじと降の雨だつたのが、花の開くように霽つた、彼岸前の日曜の朝、宗吉は朝飯前……というが、やがて、十時。……ここは、ひもじい経験のない読者にも御推読を願つておく。が、いつになつてもその朝の御飯はなかつた。

妾宅では、前の晩、宵に一度、てんどんのお誂え、夜中一時頃に蕎麦の出前が、芬と枕

くらもと  
頭くらもと を匂くつて露路ろじを入いつたことを知しつていたので、行いけば何かあるだろう……：：：天氣あまが可いいとなお食たべたい。空すきばら腹はらを抱かかいて、げつそりと落おち込むように、溝みぞの減へつた裏長屋うらながやの格子こし戸かどを開ひらけた処ところへ、突つ当ありの妾宅めかけの柳やなぎの下したから、ぞろぞろと長閑のどかそうに三人さんにん出でた。

肩幅かたはらの広ひろいのが、薄汚うすけがられた黄八丈わうはちぢょうの書生羽織しよせいを、ぞろりと着きたのは、この長屋ながやの主人あるじで、一度戸口ひらへ引ひ込んだ宗吉むねきちを横目よこめで見ると、小指こさきを出だして、

「どうした。」

と小声こゝろで言いつた。

「まだ、お寝よつてです。」

起おきるのに張合はだかがなくて、細君ほそおもちの、まだ裸体はだかで、柏餅かしわもちに包くるまくまっているのを、そう言いうと、主人しゆじんはちよつと舌したを出だして黙もつて行いく。

次つぎのは、剃そりたての頭あたまの青々あざあざとした綺麗きれいな出家しゆげ。細ほそ面おもての色いろの白しろいのが、鼠ねずみの法衣ほろもし下したの上うへへ、黒縮緬くろしゆもんの五いつつもん紋もん、——おきさんのだ、振ふりの紅あかい——羽織うゑを着きていた。昨夜ゆうべ、この露路ろじに入いつた時は、紫むらさきの輪袈裟わげさを雲うみのごとく尊まく絡かつて、水晶しゆじゆの数珠ずを提たげたのに。

と、うしろから、拳固げんこで、前まへの円まるい頭あたまをコツンと敲たたく真似まねして、宗吉むねきちを流ながしめ、ニヤ

りとして続いたのは、頭毛の真中に皿に似た禿のある、色の黒い、目の窪んだ、口の大男で、近頃まで政治家だったが、翻つて商業に志した、ために紋着を脱いで、綿銘仙の羽織を裾短に、めりやすの股引を瘦脚に穿いている。……小皿の平四郎。いずれも、花骨牌で徹夜の今、明神坂の常盤湯へ行つたのである。

行違いに、ぼんやりと、宗吉が妾宅へ入ると、食う物どころか、いきなり跡始末の掃除をさせられた。

「済まないことね、学生さんに働かしちやあ。」

とお千さんは、伊達巻一つの艶な蹴出しで、お召の重衣の裙をぞろりと引いて、黒天鵝絨の座蒲団を持って、火鉢の前を遁げながらそう言った。

「何、目下は私たちの小僧です。」

と、甘谷という横肥り、でぶでぶと脊の低い、ばらりと髪を長くした、太鼓腹に角帯を巻いて、前掛の真田をちよきんと結んだ、これも医学の落第生。追つて大実業家たらんとする準備中なのが、笑いながら言つたのである。

二人が、この妾宅の貸ぬしのお妾——が、もういい加減な中婆さん——と兼帯に使う、次の室へ立つた間に、宗吉が、ひよろひよろして、時々浅ましく下腹をぐつと泣かせなが

ら、とにかく、きれいに掃出すと、

「御苦労々々。」

と、調子づいて、

「さあ、あなた貴女。」

と、甘谷が座蒲団を引攪ひっさらつて、もとの処へ。……身体からだに似ない腰の軽い男。……もつ

とも甘谷も、つい十日ばかり前までは、宗吉と同じ長屋に貸蒲団の二ツ夜着よぎで、芋虫ごろごろしていた処——事業の運動に外出そとでがちの熊沢旦那が、お千さんの見張兼番人かたがた妾宅の方へ引取つて置くのであるから、日蔭ものでもお千は御主人。このくらいな事は当然で。

対ついでの蒲団を、とんとんと小形の長火鉢の内側へ直して、

「さ、さ、貴女。」

と自分は退いて、

「いぎまず……これへ。」と口も気もともに軽い、が、起居たちいが石臼いしうすを引摺ひきずるように、どしどしする。——ああ、無理はない、脚気かっけがある。夜あかしはしても、朝湯には行けないのである。

「可厭いやですことねえ。」

と、婀娜な目で、襖ふすま際まぎわから覗のぞくように、友染の裾すそを曳ひいた櫛卷の立姿。

五

桜にはちと早い、木瓜ぼけか、何やら、枝ながら障子に映る花の影に、ほんのりと日南ひなたかおりの薫が添そって、お千がもとの座に着いた。

向うには、旦那の熊沢が、上下大島の金鎖、あの大々したので、ドカリと胡坐あぐらを組むのであろう。

「お留守ですか。」

宗吉が何となく甘谷に言った。ここにも見えず、湯に行った中にも居なかつた。その熊沢を訊きいたのである。

縁側の片隅で、

「えへん！」と屋鳴りのするような咳せき払はらいを響かせた、便所なかの裡で。

「熊沢はここに居おるぞう。」

「まあ。」

「随分ですこと、ほほほ。」

と家主のお妾が、次の室を台所へ通がかりに笑つて行くと、お千さんが俯向いて、莞爾して、

「余り色気がなさ過ぎるわ。」

「そこが御婦人の毒でげす。」

と甘谷は前掛をポンポンと敲いて、

「お千さんは大将のあすこん処へ落ツこちたんだ。」

「あら、随分……酷いじゃありませんか、甘谷さん、余りだよ。」

何にも知らない宗吉にも、この間違は直ぐ分つた、汚いに相違ない。

「いやあ、これは、失敗、失敬、失礼。」

甘谷は立続けに叩頭をして、

「そこで、おわびに、一つ貴女の顔を剃らして頂きやしよう。いえ、自慢じやありませんがね、昨夜ツから申す通り、野郎図体は不器用でも、勝奴ぐらいにや確に使えます。剃刀を持たしちや確です。——秦君、ちよつと奥へ行つて、剃刀を借りて来たまえ。」

宗吉は、お千さんの、湯にだけは密そつと行つても、床屋へは行けもせず、呼ぶのも慎むべき境遇うなすを領うなすきながら、お妾めかけに剃刀を借りて戻る。……

「おつと！……ついでに金かな盥だらい……気を利かして、気を利かして。」

この間に、いま何か話があつたと見える。

「さあ、君、ここへ顔を出したり、一つ手際を御覧に入れないじゃ、奥さん御信用下さらない。」

「いいえ、そうじやありませんけれどもね、私まだ、そんなでもないんですから。」

「何、御遠慮にやあ及びません。間違つた処でたかが小僧の顔でさ。……ちようど、ほら、むく毛が生えて、餡子あんこの撮つまみ食くいをしたようだ。」

宗吉は、可憐あわれやゴクリと唾つを呑んだ。

「仰向あやいて、ぐつと。そら、どうです、つるつるのつるつると、鮮かなもんでげしよう。」

「何あぶなだか危あぶなツかしいわね。」

と少し膝を浮かしながら、手元を覗きいて憂きつ慮かわしそうに、動かす顔が、鉄瓶の湯気かの陽か炎げに薄絹を掛けつつ、宗吉の目に、ちらちら、ちらちら。

「大丈夫、それこの通り、ちよいちよいの、ちよいちよいと、」

「あれ、止して頂戴、止してよ。」

と浮かした膝を揺ら揺らと、袖が薰つて伸上る。

「なぜですてば。」

「危いわ、危いわ。おとなしい、その優しい眉毛を、落したらどうしましょう。」

「その事ですかい。」

と、ちよつと留めた剃刀をまた当てた。

「構やしません。」

「あれ、目の縁はまだしもよ、上は止して、後生だから。」

「貴女の襟脚を剃ろうてんだ。何、こんなものぐらい。」

「ああ、ああああ、ああーッ。」

と便所の裡で屋根へ投げた、筒抜けな大欠伸。

「笑つちやあ……不可い不可い。」

「ははははは、笑つたつて泣いたつて、何、こんな小僧ツ子の眉毛なんか。」

「厭、厭、厭。」

と支膝のまま、するすると寄る衣摺が、遠くから羽衣の音の近くように宗吉の胸に

響いた……暈の波に人魚の半身。

「どんな母さんでしょう、このお方。」

雪を欺く腕を空に、甘谷の剃刀の手を支え、突いて離して、胸へ、抱くようにして熟と視た。

「羨しい事、まあ、何て、いい眉毛だろう。親御はさぞ、お可愛いだろうねえ。」

乳も白々と、優しさと可懐しさが透通るように視えながら、衣の綾も衣紋の色も、黒髪も、宗吉の目の真暗になつた時、肩に袖をば掛けられて、面を襟に伏せながら、忍び兼ねた胸を絞つて、思わず、ほろほろと熱い涙。

お妾が次の室から、

「切れますか剃刀は……あわせに遣ろう遣ろうと思ひまじちやあ……ついね……」

自殺をするのに、宗吉は、床屋に持つて行きますよう、と言つて、この剃刀を取つて出た。それは同じ日の夜に入つてからである。

仔細は……

……さて、やがて朝湯から三人が戻つて来ると、長いこと便所に居た熊沢も一座で、また花札を弄ぶ事になつて、朝飯は鮓にして、湯豆腐でちよつと一杯、と言う。

この使のついでに、明神の石坂、開化楼裏の、あの切立の段を下りた宮本町の横小路に、相馬煎餅——塩煎餅の、焼方の、醤油の斑に、何となく轡の形の浮出して見える名物がある。——茶受にしよう、是非お千さんにも食べさしたいと、甘谷の発議。で、宗吉がこれを買いに遣られたのが事の原因であつた。

何分にも、十六七の食盛りが、毎日々々、三度の食事にがつがつしていた処へ、朝飯前とたとえにも言うのが、突落されるように峻しい石段を下りたドン底の空腹さ。……天麩羅とも、蕎麦とも、焼芋とも、芬と塩煎餅の香しさがコンガリと鼻を突いて、袋を持つた手がガチガチと震う。近飢えに、冷い汗が垂々と身うちに流れる堪え難さ。

その時分の物価で、……忘れもしない七銭が煎餅の可なり嵩のある中から……小判のごとく、数二枚。

宗吉は、一坂戻つて、段々にちよつと区劃のある、すぐに手を立てたように石坂がま

た急になる、平面な処で、銀杏の葉はまだ浅し、椛、榎の梢は遠し、楯に取るべき蔭もなしに、岨の溝端に真俯向けになつて、生れてはじめて、許されない禁断の果を、相馬の名に負う、轡をガリリと頬張る思いで、馬の口にかぶりついた。が、甘さと切なさで恥かしさに、堅くなつた胸は、自から溝の上へのめつて、折れて、煎餅は口よりもかえつて胃の中でボリボリと破れた。

ト突出した廂に額を打たれ、忍返の釘に眼を刺され、赫と血とともに総身が熱く、たちまち、罪ある蛇になつて、攀上る石段は、お七が火の見を駆上つた思いがして、頭に映す太陽は、血の色して段に流れた。

宗吉はかくてまた明神の御手洗に、更に、氷に閑らるる思いして、悚然と寒気を感じたのである。

「くすくす、くすくす。」

花骨牌の車座の、輪に身を捲かるる、危さを感じながら、宗吉が我知らず面を赤めて、煎餅の袋を渡したのは、甘谷の手で。

「おつと来た、めしあがれ。」

と一枚めくつて合せながら、袋をお七さんの手に渡すと、これは少々疲れた風情で、な

かまへは入らぬらしい。火鉢を隔てたのが請取つて、膝で覗く<sup>のぞ</sup>ようにして開けて、

「御馳走様ですね……早速お毒見。」

と言つた。

これにまた胸が痛んだ。だけなら、まださほどまでの仔細はなかつた。

「くすくす、くすくす。」

宗吉がこの座敷へ入りしなに、もうその忍び笑いの声が耳に附いたのであるが、この時、お千さんの一枚撮<sup>つま</sup>んだ煎餅を、見ないように、ちよつと傍<sup>わき</sup>へかわした宗吉の顔に、横から打撞<sup>ぶつか</sup>つたのは小皿の平四郎。……頬骨の張つた菱形の面<sup>つら</sup>に、窪<sup>くぼ</sup>んだ目を細く、小鼻をしかめて、

「くすくす。」

とまた遣つた。手にわるさに落ちたと見えて札は持たず、鍍金<sup>めつき</sup>の銀煙管<sup>ぎんぎせる</sup>を構えながら、めりやすの股引<sup>ももひき</sup>を前はだけに、片膝を立てていたのが、その膝頭に頬骨をたたき着けるようにして、

「くすくすくす。」

続けて忍び笑<sup>わらい</sup>をしたのである。

立<sup>たて</sup>つ<sup>つ</sup>けて、

「くツくツくツ。」

七

「こつちは、びきを泣かせてやれか。」

と黄八丈が骨牌<sup>ふだ</sup>を捲<sup>めく</sup>ると、黒縮緬の坊さんが、紅<sup>あか</sup>い裏を翻<sup>ひら</sup>然<sup>り</sup>と翻<sup>かえ</sup>して、

「餓鬼め。」

と投げた。

「うふ、うふ、うふ。」と平四郎の忍び笑が、齒茎を洩<sup>も</sup>れて声に出る。

「うふふ、うふふ、うふふふふふ。」

「何<sup>なん</sup>じやい。」と片手に猪口<sup>ちよく</sup>を取りながら、黒天鵝絨<sup>くろびろうじ</sup>の蒲団<sup>ふとん</sup>の上に、萩、菖蒲<sup>あやめ</sup>、桜、牡丹<sup>ぼたん</sup>

の合戦を、どろんとした目で見据<sup>お</sup>えていた、大島揃<sup>おおしまぞろい</sup>、大胡坐<sup>おおあぐら</sup>の熊沢が、ぎよろりと

平四郎を見向<sup>ま</sup>いて言う<sup>い</sup>うと、笑<sup>わら</sup>いの虫は蕃<sup>とう</sup>椒<sup>がらし</sup>を食<sup>く</sup>ったように、赤<sup>あか</sup>くなるまで赫<sup>かつ</sup>と競<sup>き</sup>勢<sup>お</sup>つ

て、

「うはははは、うふふ、うふふ。うふふ。えッ、いや、あ、あ、ち、あははははは、はッ  
 はッはッはッ、テ、ウ、えッ、えッ、えッ、えへへ、うふふ、あはあはあは、あは、あは  
 ははははは、あはははは。」

「馬鹿な。」

と唇を横舐めずつて、熊沢がぬつと突出した猪口に、酌をしようとして、銅壺どうこから抜き  
 かけた銚子ちようしの手を留め、お千さんが、

「どうしたの。」

「おほほ、や、お尋ねでは恐入るが、あはは、テ、えッ。えへ、えへへ、う、う、ちえッ、  
 堪たまらない。あッはッはッはッ。」

「魔まが魅さしたようだ。」

甘谷あきが呆あきれて眩つふやく、……と寂然しんとなる。

寂寞しんとなると、笑わらいばかりが、

「ちやはははは、う、はは、うふ、へへ、ははは、えへへへ、えッへ、へへ、あははは、  
 うは、うは、うはは。どっこい、ええ、ち、ちやはは、エ、はははは、ははははは、うッ、  
 うッ、えへッへッへッ。」

と横のめりに平四郎、煙管の雁首で脾腹を突いて、身悶えして、

「くツ、苦しい……うツ、うツ、うツふふふ、チ、うツ、うううう苦しい。ああ、切ない、あはははは、あはツはツはツ、おお、コ、こいつは、あはは、ちやはは、テ、チ、たツたツ堪らん。ははは。」

と込上げ揉立て、真赤になった、七顛八倒の息継に、つぎ冷しの茶を取って、がぶりと遣ると、

「わツ。」と咽せて、灰吹を掴んだが間に合わず、火入の灰へぶツと吐くと、むらむらと灰かぐら。

「ああ、あの児、障子を一枚開けていな。」

と黒縮緬の袖で払って出家が言った。

宗吉は針の筵を飛上るように、そのもう一枚、肘懸窓の障子を開けると、颯と出る灰の吹雪は、すツと蒼空に渡って、遙に品川の海に消えた。が、蔵前の煙突も、十二階も、睫毛に一瞬の北の方、目の下、一雪崩に崖になつて、崖下の、ごみごみした屋根を隔て、日南の煎餅屋の小さな店が、油障子も覗かれる。

ト斜に、がツくりと窪んで暗い、岨と石垣の間の、遠く明神の裏の石段に続くのが、大

蜈蚣むかでのように胸前むなさきに舂うねつて、突当りに牙きばを嚙かみ合うごとき、小さな黒堀くろほりの忍がえしび返かえの下したに、溝とぶから這はいあが上あつた蛆うじの、醜みにくい汚よごい筋すぢをぶるぶると震ふるわせながら、麩ふを嘗なめるような形かたちが、歴然ありありと、自分おのが瞳まなこに映うつつた時とき、宗吉むねきちはもはや蒼まつ白しろになつた。

ここから認みられたに相違ちがひない。

と思う平四郎へいしやうは、涎よだれと一所いしょに、濡ぬらした膝ひざを、手巾ハンケチで横撫よこなでしつ、

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ。……大歎息おほためいきとともに尻しりを曳ひいたなごりの笑わらいが、更に、がらがらと雷かみなりの鳴返なみかへすごとく少年せうねんの耳みみを打うつ！……

「お煎せんをめしあがれな。」

目の下の畦せきが切立きつたてだつたら、宗吉むねきちは、お千ちぢさんのその声こゑとともに、倒さかしまに落おちてその場ばで五体ごたいを微塵みじんにしたろう。

産うみの親おやを可懐なつかしむまで、眉ひとひらの一片ひとひらを庇かばつてくれた、その人ひとばかりに恥はかしい。……

「ちよつと、宅うちまで。」

と息いきを呑のんで言いつた——宅うちとは露路ろじのその長屋ながやで。

宗吉むねきちは、しかし、その長屋ながやの前まへさえ、遁にげ隠かくれるように素通すとおりして、明神あきみの境内きんのあなただこなた、人目ひとめの隙すきの隅々すみずみに立たつて、飢うえさえ忘われて、半日はんじつを泣ないて泣なきくらしした。

星も曇つた暗き夜に、

「おかみさん——床屋へ剃刀を持って参りましょう。ついでがございますから……」

宗吉はわざと格子戸をそれて、蚯蚓みみずの這うように台所から、密そつと妾宅へおとずれて、家主の手から剃刀を取つた。

間まを隔てた座敷に、艶あでやかな影が氣勢けはいに映つて、香水の薫かおりは、つとはしり下もとにも薫つた。が、寂ひっそり寞そりしていた。

露路の長屋の赤い燈あかりに、珍しく、大入道やら、五分刈やら、中にも小皿かむろで禿かむろなる影法師が動いて、ひそひそと声の漏れるのが、目を忍び、音ねを憚はばかる出入りには、宗吉のために、むしろ僥さいわい倖わいだったのである。

八

「何をするんですよ、何をするんですよ、お前さん、串じょうだん戲だんではありません。」

社殿の裏なる、空茶店あきちやみせの葦簀よしずの中で、一方の柱に使つた片隅なる大木の銀杏いちようの幹こに凭より掛かつて、アワヤ剃刀を咽喉のどに当てた時、すつと音して、滝たき縞しまの袖で抱いたお千さん

の姿は、……宗吉の目に、高い樹の梢から颯と下りた、美しい女の顔した不思議な鳥のよ  
うに映った——

剃刀をもぎ取られて後は、茫然として、ほとんど夢心地である。

「まあ！ 可かった。」

と、身を捻じて、肩を抱きつつ、社の方を片手拝みに、

「虫が知らしたんだわね。いま、お前さんが台所で、剃刀を持って行くって声が聞えたでしょう、ドキリとしたのよ。……秦さん秦さんと言ったけれど、もう居ないでしょう。何だかね、こんな間違がありそうな気がしてならない、私。私、でね、すぐに後から駆出したのさ。でも、どこって当はないんだもの、鳥居前のあすこの床屋で聞いてみたの。まあね、……まるでお見えなさらないと言うじやあないの。しまった、と思ったわ。半分夢中で、それでも私がここへ来たのは神、仏のお助けです。秦さん、私が助けるんだと思っちゃあ不可い。可うござんすか、可いかえ、貴方。……親御さんが影身に添っていなさるんですよ。可うござんすか、分りましたか。」

と小児のように、柔い胸に、帯も扱帯もひつたりと抱き締めて、

「御覧なさい、お月様が、あれ、仏様が。」

忘れはしない、半輪の五日の月が黒雲を下りるように、莊嚴なる銀杏の枝に、梢さがりに掛つたのが、可懐い亡き母の乳房の輪線の面影した。

「まあ、これからという、……女にしても蓄のいま、どうして死のうなんてしたんですよ。

——私に……私……ええ、それが私に恥かしくって、——」

その乳の震が胸に響く。

「何の塩煎餅の二枚ぐらい、貴方が掏賊でも構やしない——私はね、あの。……まあ、とにかく、内へ行きましょう。可い塩梅に誰も居ないから。」

促して、急いで脱放しの駒下駄を捜る時、白脛に緋が散った。お千も慌しかったと見えて、宗吉の穿物までは心着かず、可恐しい処を遁げるばかりに、息せいて手を引いたのである。

魔を除け、死神を払う禁厭であるう、明神の御手洗の水を掬って、雫ばかり宗吉の頭髪を濡らしたが、

「……息災、延命、息災延命、学問、学校、心願成就。」

と、手よりも濡れた瞳を閉じて、頸白く、御堂をば伏拝み、

「一口めしあがれ、……気を静めて——私も。」

と柄杓ひしゃくを重げに口にした。

「動悸どうきを御覧なさいよ、私のさ。」

その胸の轟とどろきは、今より先に知ったのである。

「秦さん、私は貴方を連れて、もうあすこへは戻らない。……身にも命にもかえてね、お手伝をしますがね、……実はね、今明神様におわびをして、貴方のお頭つむを濡らしたのは——実は、あの、一度内へ帰ってね。……この剃刀で、貴方を、そりたての今道心にして、一緒に寝ようと思ったのよ。——あのね、実はね、今夜あたり紀州のあの坊さんに、私が抱かれて、そこへ、熊沢だの甘谷だのが踏込んで、不義いたずらの罪に落そうという相談に……どうでも、と言って乗せられたんです。」

……あの坊さんは、高野山とかの、金かね高たかなお宝ものを売りに出て来ているんでしょう。どことかの大金持だの、何省の大臣だのに売ってやると言って、だまして、熊沢が皆質に入れて使ってしまったて、催促される、苦しまぎれに、不断、何だか私にね、坊さんが厭味いやみらしい目つきをするのを知っていて、まあ大それた美人局つもとせだわね。

私が弱いもんだから、身体からだも度胸もずばぬけて強そうな、あの人をたよりにして、こんな身裁しだらになつたけれど、……そんな相談をされてからはね……その上に、この眉毛まみえを見て

からは……」

と、お千は密と宗吉の肩を撫でた。

「つくづく、あんな人が可厭になつた。——そら、どかどかと踏込むでしょう。貴方を抱いて、ちやんと起きて、居直つて、あいそづかしをきつぱり言つて、夜中に直ぐに飛出して、溜飲を下げてやろうと思つたけれど……どんな発機で、自棄腹の、あの人たちの乱暴に、貴方に怪我でもさせた日にや、取返しがつかないから、といま胸に手を置いて、分別をしたんですよ。」

さ、このままどこかへ行きましよう。私に任して安心なさいよ。……貴方もきつとあの人たちに二度とつき合つては不可ません。」

裏畦の石段を降りる時、宗吉は狼の峠を越して、花やかな都を見る気がした。

「い……そう……」

お千さんが莞爾して、塩煎餅をかうのに、昼夜帯を抽いたのが、安ものらしい、が、萌黄の金入。

「食べながら歩行ましよう。」

「弱虫だね。」

大通へ抜ける暗がり、甘く、且つ香しく、皓齒でこなしたのを、口移し……

九

宗吉が夜学から、徒士町のとある裏の、空瓶屋と襦袢屋の間の、貧しい下宿屋へ帰ると、引傾いだ濡縁づきの六畳から、男が一人摺違いに出て行くと、お千さんはパツと障子を開けた。が、もう床が取つてある……

枕元の火鉢に、はかり炭を継いで、目の破れた金網を斜に載せて、お千さんが懐紙であおぎながら、豌豆餅を焼いてくれた。

そして熱いのを口で吹いて、嬉しそうな宗吉に、浦里の話をした。

お千は、それよりも美しく、雪はなけれど、ちらちらと散る花の、小庭の湿地の、石炭殻につもる可哀さ、痛々しさ。

時次郎でない、頬被したのが、黒塀の外からヌツと覗く。

お千が脛白く、はつと立って、障子をしめようとする目の前へ、トンと下りると、つ

かつかと縁側へ。

「あれ。」

「おい、気の毒だがちよつと用事だ。」

と袖から蛇の首のように捕縄とりなわをのぞかせた。

膝をなえたように支つきながら、お千は宗吉を背後うしろに困こつて、

「……この人は……」

「いや、小僧に用はない。すぐおいで。」

「宗ちゃん、……朝の御飯はね、煮豆が買かつて蓋ふたものに、……紅生薑べにしやうがと……紙かみの蔽おおいがし

てありますよ。」

風俗係は草履を片手に、もう入口の襖ふすまを開けていた。

お千が穿はきものをさがすうちに、風俗係は、内から、戸の錠をあけたが、軒を出ると、ひ

たりと腰縄を打った。

細腰はふつと消えて、すぼめた肩が、くらがりの柳に浮く。

……そのお千には、もう疾とに、羽織もなく、下着もなく、膚はだえただ白く縞しまの小袖の萎なえた

るのみ。

宗吉は、はだし跣足で、めそめそ泣きながら後を追った。

目も心も真まっくら暗で、町も処も覚えなない。颯さっと一条の冷い風が、電燈の細い光に桜を誘つた時である。

「旦那。」

とお千が立停たちどまって、

「宗ちゃん——宗ちゃん。」

振向きもしないで、うなだれたのが、気を感じて、眉を優しく振向いた。

「……………」

「姉さんが、魂をあげます。」——たど辿りながら折つたのである。……懐紙の、白い折鶴が掌てにあつた。

「この飛ぶ処へ、すぐおいで。」

ほつと吹く息、うすくれない薄紅に、折鶴はかえつて蒼白く、はなびら花片にふつと乗つて、ひらひらと空を舞つて行く。……これが落ちた大な門おおきで、はたして宗吉は拾われたのであつた。

電車が上り下りともほとんど同時に来た。

宗吉は身動きもしなかった。

と見ると、丸鬚まるまげの女が、その緋縮緬ひぢりめんの傍そばへ衝つと寄って、いつか、肩ぬげつつ裏すべの二

つた効性かいしょうのない羽織を、上から引合せてやりながら、

「さあ、来ました。」

「自動車ですか。」

と目を睜みはつたまま、緋縮緬の女はきよろんとしていた。

十

としわか  
年若い駅員が、

「貴方がたは？」

と言った。

乗り余つた黒山の群集も、三四輛立続けに来た電車が、泥まで綺麗きれいに浚さらつたのに、まだ待合所を出なかつた女二人、（別に一人）と宗吉をいぶかつたのである。

宗吉は言つた。

「この御婦人が御病気なんです。」

と、やっぱり、けろりと仰向あおむいている緋縮緬あおむの女を、外套がいとうの肘ひじで庇かばって言った。

駅員の去ったあとで、

「唯ただいま今、自動車を差上げますよ。」

と宗吉は、優しく顔を覗のぞきつつ、丸鬻のぞの女に瞳を返して、

「巢鴨はお見合せを願えませんか。……きつと御介抱申します。私はこういふものです。」

なふだに医学博士——秦宗吉とあるのを見た時、……もう一人居た、散切さんぎりで被布ひきぬの女

が、P形に直立して、Zのごとく敬礼した。これは附添ぞうしふの雑仕婦ざうしふであったが、——博士が、

その従弟の細君に似たのをよすがに、これより前さき、丸鬻のぞの女に言ことばを掛けて、その人品のゆ

えに人をして疑わしめず、連つれは品川の某楼つれの女郎で、気の狂ったため巢鴨の病院に送るの

だが、自動車で行きたい、それでなければ厭いやだと言う。そのつもりにして、すかして電車

で来ると、ここで自動車でないからと言って、何でも下りて、すねたのだと言う。……丸

鬻のぞは某楼のその娘分。女郎の本名をお千と聞くまで、——この雑仕婦は物頂面ぶつちようづらして睨にら

んでいた。

不時の回診に驚いて、ある日、その助手たち、その白衣の看護婦たちの、ばらばらと急いで、しかも、静粛に駆寄るのを、徐ろに、左右に辞して、医学博士秦宗吉氏が、

「いえ、個人で見舞うのです……皆さん、どうぞ。」

やがて博士は、特等室にただ一人、膝も胸も、しどけない、けろんとした狂女に、何と……手に剃刀かみそりを持たせながら、臥床ベッドに跪ひざまずいて、その胸に額を埋めて、ひしと縫すって、漕さ然んぜんとして泣きながら、微笑ほほえみながら、身も世も忘れて愚に返ったように、だらしなく、涙なみだを髻ひげに伝わらせていた。

大正九（一九二〇）年五月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 売色鴨南蛮

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>